

岩手県夏油地域の鳥類群集

金子 与止男*

要 旨 ほぼ全域がブナ林に覆われている岩手県夏油地域で鳥類の調査を実施し、23科53種の鳥類を記録した。最優占種はキビタキであり、これにウグイス、シジュウカラ、ヒガラ、オオルリ、コルリ、センダイムシクイと続いた。1,000mを境に低標高部と高標高部に分けると、前者ではキビタキ、シジュウカラ、オオルリ、ヒガラが多く出現し、後者ではウグイス、コルリ、シジュウカラ、クロジが多く出現した。夏油全域で見ると、林床植生の密なブナ林の典型的な鳥類群集であると言える。

キーワード 夏油、ブナ林、鳥類群集、優占種

1. はじめに

夏油は岩手県北上市和賀町に位置し、夏油温泉があることで有名である。夏油三山として知られる駒ヶ岳（駒形山）、経塚山、牛形山のほか、鞍掛森山、横岳、鷲ヶ森山、白っこ森に囲まれた地域であり、そこを南西から北東方向に夏油川が貫流している。

筆者は、北上市内での生物多様性構成要素の調査の一環として、夏油地域の鳥類の調査を2015年と2016年に実施した。本稿はその結果をまとめたものである。

2. 調査地と調査方法

調査地は、上記の駒ヶ岳、経塚山、牛形山、鞍掛森山、横岳、鷲ヶ森山、白っこ森に囲まれた夏油川流域であり、鉢森沢にかかる夏油高原橋から上流である。夏油は広大な範囲にわたりブナ *Fagus crenata* が優占しており、風当たりの弱い緩斜面には樹高30mにも達する発達したブナ林があちこちに見られる。沢沿いにはブナのほかに、高木のカツラ *Cercidiphyllum japonicum*、ミズナラ *Quercus crispula*、サワグルミ *Pterocarya rhoifolia*、トチノキ *Aesculus turbinata* が混在する。尾根筋も基本的にはブナ

林であるが、標高の高い風衝地は樹高が低く、山頂近くでは灌木林の様相を呈している。低標高部のブナは樹冠の連なる林を形成しているが、高標高部では樹冠が連ならないブナ林が多い。そうしたところでは、タムシバ *Magnolia salicifolia*、リョウブ *Clethra barbinervis*、ミズナラ、ハウチワカエデ *Acer japonicum* などの低木やチシマザサ *Sasa kurilensis* が発達している。林床は一般的にチシマザサが優占し、とくに高標高部では密生している。鉢森沢から夏油温泉に向かう車道沿いには、ヤマハンノキ *Alnus hirsuta* やウダイカンバ *Betula maximowicziana* なども見られる。鉢森沢から岩倉沢の間には、多くはないもののスギやカラマツの植林地が存在する。痩せ尾根にはキタゴヨウ *Pinus parviflora* var. *pentaphylla* が生育する。山頂付近は、いずれの山岳も植生高が低く、牛形山と経塚山では草地状となっており、岩場も存在する。

調査地内にある車道、林道、登山道を利用して、調査路とした（図1）。図中、鉢森沢からウシロ沢まで（AおよびB）が舗装された車道で、ウシロ沢から経塚山二合目まで（G）が林道、ほかはすべて登山道である。

調査路をゆっくり歩きながら、両側それぞれ

*岩手県立大学総合政策学部 〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52

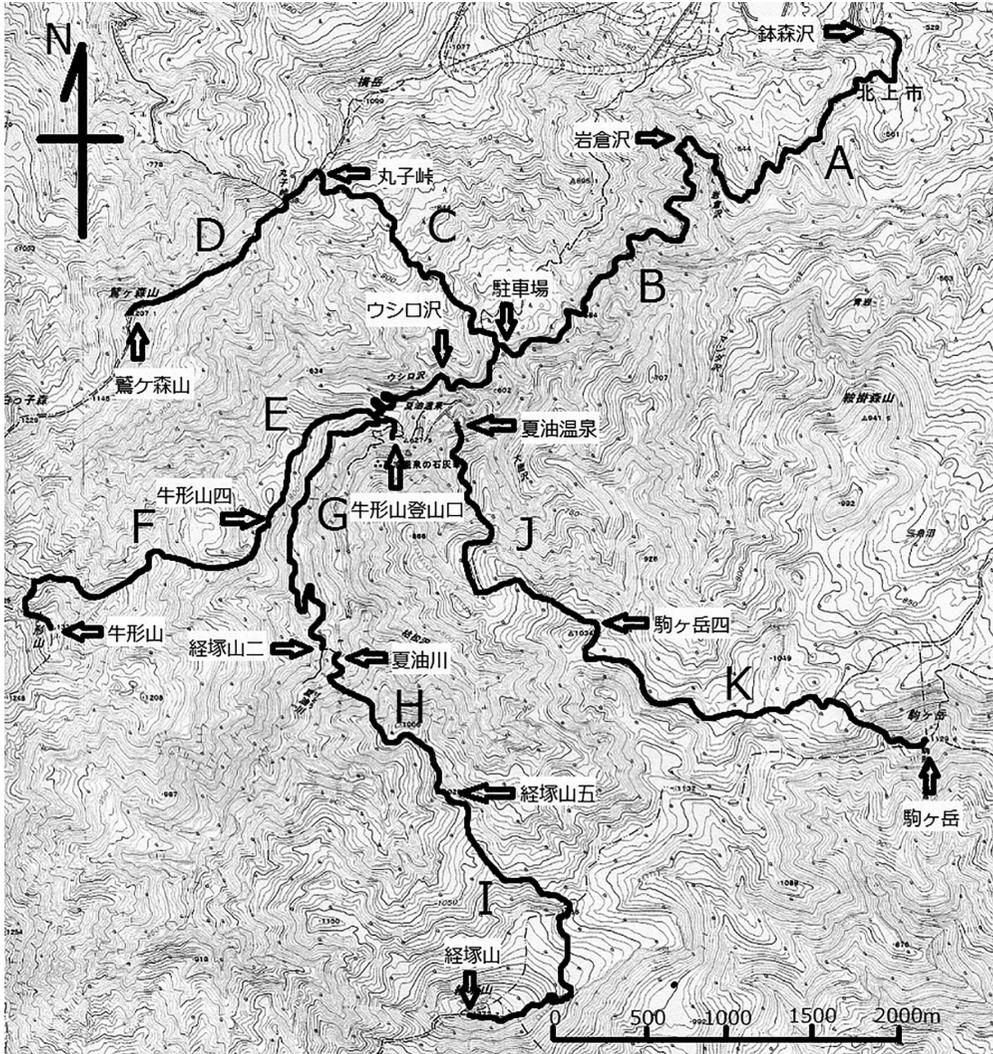


図1. 調査路の位置

50m、計100m幅の範囲に出現した鳥類の種名と個体数を目視と鳴き声により記録する線センサス法を採用した。調査日時、センサス区間の概要を表1に示す。

3. 結果と考察

(1) 出現種

本調査で、23科53種の鳥類を記録した(文末表2)。これには表1に示したセンサス日時以外、センサス範囲外で確認した種も含まれている。

53種のなかで、岩手県には春に渡ってきて、秋

に南方に渡去する夏鳥と目される種が、アオバト、ジュウイチ、ホトトギス、ツツドリ、カクコウ、ヨタカ、アカショウビン、イワツバメ、ウグイス、ヤブサメ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、マミジロ、クロツグミ、アカハラ、コルリ、キビタキ、オオルリ、ビンズイ、ノジコ、クロジの21種であった。秋季に北方から渡来し、春季に渡去する冬鳥は、冬季に1回の調査であったこともあり、ツグミ、アトリ、マヒワ、カシラダカの4種しか記録できなかった。残りの28種は県内で1年じゅう見られる留鳥である。ただし、留鳥の場合、同一個

表1. センサス区間の概要

年月日	時間	センサス区間および標高	距離(km)
2015/6/13	08:10~09:02	岩倉沢 579m~鉢森沢 528m	2.33
	09:07~09:57	鉢森沢 528m~岩倉沢 579m	2.33
	10:10~11:09	ウシロ沢 565m~岩倉沢 579m	3.06
	11:13~12:16	岩倉沢 579m~ウシロ沢 565m	3.06
	13:48~15:15	ウシロ沢 565m~経塚山二合目 718m	2.13
	15:17~16:32	経塚山二合目 718m~ウシロ沢 565m	2.13
2015/6/14	06:26~08:00	夏油温泉 579m~駒ヶ岳四合目 997m	1.98
	08:05~09:48	駒ヶ岳四合目 997m~駒ヶ岳 1130m	2.23
	10:00~11:42	駒ヶ岳 1130m~駒ヶ岳四合目 997m	2.23
	12:07~13:36	駒ヶ岳四合目 997m~夏油温泉 579m	1.98
2015/7/4	05:37~07:17	駐車場 572m~丸子峠 973m	1.45
	07:25~08:47	丸子峠 973m~鷲ヶ森山 1207m	1.38
	09:00~10:22	鷲ヶ森山 1207m~丸子峠 973m	1.38
	10:30~11:48	丸子峠 973m~駐車場 572m	1.45
2015/7/16	06:05~07:04	登山口 626m~牛形山四合目 865m	1.05
	07:04~08:59	牛形山四合目 865m~牛形山 1339m	1.78
	09:00~10:46	牛形山 1339m~牛形山四合目 865m	1.78
	10:46~11:38	牛形山四合目 865m~登山口 626m	1.05
	13:34~14:22	岩倉沢 579m~鉢森沢 528m	2.33
2015/12/2	07:50~08:50	鉢森沢 528m~岩倉沢 579m	2.33
	08:50~09:51	岩倉沢 579m~ウシロ沢 565m	3.06
	10:01~11:00	ウシロ沢 565m~岩倉沢 579m	3.06
	11:03~11:55	岩倉沢 579m~鉢森沢 528m	2.33
2016/6/29	07:08~08:38	夏油川 674m~経塚山五合目 1029m	1.05
	08:38~10:44	経塚山五合目 1029m~経塚山 1372m	2.00
	10:55~12:44	経塚山 1372m~経塚山五合目 1029m	2.00
	12:47~13:53	経塚山五合目 1029m~夏油川 674m	1.05
2016/7/23	04:57~05:42	岩倉沢 579m~鉢森沢 528m	2.33
	05:46~06:40	鉢森沢 528m~岩倉沢 579m	2.33
	08:08~09:20	ウシロ沢 565m~岩倉沢 579m	3.06
	09:25~10:30	岩倉沢 579m~ウシロ沢 565m	3.06

体が県内に1年じゅう留まることを意味しない。同一種でも、冬季に南方に移動する個体もあれば、北方から移入してくる個体もあるからである。岩手県内では、留鳥であっても、メジロ、キセキレイ、ホオジロのように、冬季には個体数を極端に減じる種もある。

(2) 個体数

個体数は、線センサス法により把握した。ただし、この調査法は調査地に生息している鳥類の個体数を正確に調べる方法ではない。絶対数に近い値を得るには、テリトリーマッピング法という調査法が採用されるが、調査のやりやすさなど、地形の影響を受ける。夏油のように標高差のある急峻なところでは適さない。線センサス法はおおまかではあるが、広範な地域の鳥類の生息状況の概要を知るのに適している。いずれの調査区間も、往復しており、種ごとに個体数の多い値を代表値として採用した。なお、A区間とB区間については、いずれも年をまたいで複数回調査しており、これも最大値を採用した。その結果を示したのが表3である。

個体数の多かったのがK区間とC区間で、1km当たりそれぞれ46.6羽と43.5羽を記録した。K区間は、夏油温泉から駒ヶ岳への登山道の後半である。K区間では、とくにコルリとシジュウカラが多く、これにウグイスとヒガラが続いた。C区間は車道から丸子峠までの区間で、とくにキビタキが突出して多かったほか、シジュウカラやヒガラも多く出現した。一方、少なかったのはE区間とF区間で、1km当たり18.1羽と18.5羽であった。E区間は、夏油温泉の先から牛形山に向かう登山道の前半である。F区間は、牛形山への登山道の後半である。A区間からK区間までを合計すると、1km当たり28.9羽が出現したことになる。

図2は夏油地域全域(A区間～K区間)に出現した鳥類の種別優占度を表している。それによれば、キビタキとウグイスがそれぞれ12.2%、11.9%で、上位1位、2位を占めていた。シジュウカラ、ヒガラ、オオルリ、コルリ、センダイムシクイ、クロ

ジと続いた。

由井(1976)は自身のセンサス記録を含む日本各地でのデータをもとに、林相の違いによる鳥類群集の類型化を試みた。それによると、夏油地域を含む本州中北部ブナ林では、シジュウカラ、ヒガラ、キビタキ、ウグイス、コガラ、コルリが優占しているという。秋田県の森吉山(1,454m)のブナ林で定点センサスをおこなった鈴木(2000)は、ブナの優占する標高域(630m～1,150m)では、コルリ、ヒガラ、キビタキ、ウグイスが優占していたことを報告している。鈴木(1999)は同じ定点センサス法で津軽半島の袴腰岳(707m)のブナ林(220m～707m)の鳥類群集の調査をおこなった。それによると、コルリ、ヒガラ、ウグイス、キビタキが優占していたという。白神山地のブナ林(350m～450m)でテリトリーマッピング法を用い調べた鈴木ほか(2005)によると、キビタキ、ヒガラ、シジュウカラ、コガラ、ゴジュウカラが優占しており、下層植生が少ないためコルリやウグイスはほとんど記録されなかった。このように見てくると、夏油の鳥類群集は、東北地方の下層植生の多いブナ林の典型的な鳥類群集であると言ってよいだろう。

(3) 標高分布

A区間からK区間までを、標高ほぼ1,000mを境に低標高部(A, B, C, E, G, H, J)と高標高部(D, F, I, K)に区分して表したのが、図3、図4である。両図からわかるように、低標高部でのみ出現した種は、ツツドリ、ヒヨドリ、エナガ、アオバト、クロツグミ、カワガラス、クマタカ、トラツグミ、ノジコ、メジロの10種であった。高標高部でのみ出現したのは、ウソ、エゾムシクイ、ビンズイ、ホシガラスの4種であった。これらのうち、カワガラスは溪流の鳥であることから低標高部のみで記録されたと考えられる。ノジコは標高の最も低い鉢森沢付近で囀っていた1個体を記録した。東北地方ではノジコは標高の低いところに生息する鳥である。ビンズイは、夏油と同じ岩手県内の標高700mの岩洞湖周辺には多数生息している。夏油

表3. 各センサスにおける出現種と個体数。往復の最大値を採用している。
多様度はShannonの指数 ($H' = -\sum P_i \log_2 P_i$)

種名\調査区間	2015年 6/13		2015年 6/13		2015年 6/14		2015年 6/14		2015年 7/4		2015年 7/4		2015年 7/16		2015年 7/16		2016年 6/29		2016年 6/29		2016年 7/23		2016年 7/23	
	A	B	G	J	K	C	D	E	F	A	H	I	A	B	A	H	I	A	B	A	B	A	B	
ヤマドリ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2	・		
キジバト	2	3	・	3	2	2	1	1	・	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	6	1			
アオバト	1	・	・	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1		
ジュウイチ	・	・	・	・	1	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・		
ホトトギス	1	1	・	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	・	・	・	1	・	2	1	1			
ツツドリ	3	1	・	2	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・		
カッコウ	・	・	・	・	・	1	1	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・		
クマタカ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1		
コゲラ	・	・	・	3	2	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	・	・	1	2	1	2			
オオアカゲラ	・	・	・	・	・	・	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2	・	・			
アカゲラ	・	3	2	1	1	・	・	1	1	・	1	・	1	・	1	・	1	・	・	・	・			
アオゲラ	・	1	1	・	2	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	2	・	・	・	・	・			
モズ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	1	・	1	・	・	・	・	・	・	・			
カケス	1	3	1	1	・	3	1	1	1	1	2	・	3	・	・	・	3	・	・	・	・			
ホシガラス	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	・	・	・	・			
ハシブトガラス	1	1	・	・	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1			
コガラ	1	・	・	・	・	2	・	2	1	2	1	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・			
ヤマガラ	3	3	3	1	2	1	・	1	・	1	1	・	1	1	・	・	・	・	・	・	1			
ヒガラ	6	4	6	5	8	6	・	2	2	2	1	2	1	2	1	2	1	3	1	3				
シジュウカラ	7	4	5	6	15	6	1	2	1	5	2	2	5	2	2	・	5	・	5	・	5			
ヒヨドリ	3	・	1	・	・	・	・	・	・	3	・	・	3	・	・	1	3	・	3	・	3			
ウグイス	5	3	3	5	9	5	8	・	11	4	4	17	5	2	・	2	5	2	・	2	2			
ヤブサメ	・	3	2	6	2	3	・	・	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・			
エナガ	・	・	・	5	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・			
エゾムシクイ	・	・	・	・	4	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	・	・	・	・			
センダイムシクイ	7	8	1	3	6	1	・	・	1	・	・	1	・	・	1	・	・	・	・	・	・			
メジロ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1			
ゴジュウカラ	・	・	・	2	2	3	2	1	1	・	・	2	・	・	2	・	2	・	2	・	2			
ミンサザイ	2	3	1	・	6	4	2	・	・	・	1	4	2	・	4	2	・	・	・	・	・			
カワガラス	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1			
マミジロ	・	・	・	・	2	1	・	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・			
トラツグミ	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・			
クロツグミ	1	・	・	・	・	1	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1			
コルリ	3	・	1	1	19	3	1	・	・	・	・	5	・	・	5	・	・	・	・	・	・			
キビタキ	9	6	13	7	6	13	2	3	3	5	6	4	1	1	・	1	1	1	1	1	1			
オオルリ	2	12	10	4	4	2	・	1	・	1	2	・	1	1	・	1	1	1	1	1	1			
キセキレイ	1	2	1	1	1	・	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・			
ビンスイ	・	・	・	・	・	・	・	・	2	・	・	3	・	・	・	3	・	・	・	・	・			
ウソ	・	・	・	・	2	・	2	・	2	・	・	1	・	・	1	・	・	・	・	・	・			
ホオジロ	・	2	1	・	・	・	1	・	・	1	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・			
ノジコ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・			
クロジ	・	・	・	1	6	3	6	・	3	・	2	3	・	2	3	・	3	・	・	・	・			
種数	20	18	16	20	22	21	16	14	16	13	13	16	12	17	13	16	12	17	13	16	12	17		
個体数合計	60	63	52	60	104	63	33	19	33	29	25	50	27	28	29	25	50	27	28	29	25	50		
多様度指数(H')	3.91	3.82	3.36	4.01	3.93	3.94	3.54	3.57	3.42	3.41	3.38	3.35	3.28	3.84	3.41	3.38	3.35	3.28	3.84	3.41	3.38	3.35	3.28	

では、牛形山(1,339m)と経塚山(1,372m)のいずれも山頂付近でしか確認できなかった。ホシガラスは一般に針葉樹のオオシラビソ林やハイマツ林に好んで生息する。夏油はオオシラビソ林を欠いており、天然生の針葉樹としては低標高部の痩せ尾根のキタゴヨウのほかには、牛形山山頂近くのハイマツ、「お坪の庭」(1,098m)周辺のコメツガ、鷲ヶ森山のイチイなどがあるが、いずれも小面積であり、植生的には全域がブナ林である。夏油では、繁殖期にブナ帯でホシガラスが生息していることは興味深い。一般に亜高山帯を好むウソは、高標高部にのみ出現した。その他の鳥類については、調査回数を増やせば、低標高部、高標高部のいずれでも出現するかもしれない。

低標高部ではキビタキが最優占種であり、オオルリ、シジュウカラ、ヒガラ、ウグイス、センダイムシクイと続いた。一方、高標高部ではウグイスが最優占種で、コルリ、シジュウカラ、クロジ、キビタキ、ヒガラと続いた。低標高部でキビタキが突出して多かったのは、低標高部には樹冠の連なる樹高の高いブナが多く、林内に大きな空間が形成されていることで、空中で飛びながら昆虫を捕食(flycatch)する習性をもつキビタキに好適なハビタットとなっていることが原因であろう。オオルリは溪流沿いに多い鳥である。高標高部で優占していたウグイス、コルリ、クロジのいずれも笹藪など下層植生が密生しているところを好み、ウグイスは上層に樹木がなくとも生息するが、コルリとクロジは樹木を必要とする。高標高部の樹冠の連ならないブナ林の下層にはチシマザサが密生し、ブナとブナの間は灌木や低木が生い茂っている。風衝地はチシマザサではほぼ覆われており、ウグイスに好適な環境を提供している。

各鳥種がどの標高帯で出現したかを表したのが図5である。ホオジロは700m以下と1,100m以上に出現した。1,100m以上に記録があるのは、鷲ヶ森山の山頂(標高1,207m)付近で出現したからで、1個体が囀っていた。ホシガラスは、1,300m以上で2個体を記録しており、いずれも鷲ヶ森山と経塚山の山頂付近であった。また、牛形山に向かう

途中でも、遠方からホシガラスの鳴き声を聴いた。コルリは、調査地でも標高の最も低い鉢森沢近くのブナ林から駒ヶ岳の山頂近くまで広範囲に出現し、とくに高標高部のK区間に多かった。コルリは、岩手県内では好適な環境さえあれば、海岸近くの森林(たとえば重茂半島)から八幡平に至る広範囲の標高に生息する鳥である。なお、すべての標高帯で出現したのは、ウグイスのみであった。

(4) 調査時期と記録個体数

A区間は2015年6月13日、7月16日、2016年7月23日の3回の調査であった。B区間は2015年6月13日と2016年7月23日の2回の調査であった。線センサス法による記録率は、天候、時期、時間などにより影響されることが知られている(由井 1974)。A区間とB区間については複数回調査しているのので、調査時期と記録個体数の関係を見てみたい。

表3からわかるように、調査日により記録個体数が大きく異なっていた種は、キビタキ、オオルリ、コルリ、センダイムシクイ、ヒガラ、ミソサザイの6種であった。A区間では、キビタキは2015年6月13日には9羽が記録されたのが、7月16日は5羽、翌2016年7月23日になると1羽しか記録されなかった。A区間で6月13日に3羽が記録されたコルリは、7月16日には0羽、翌年の7月23日も0羽であった。センダイムシクイは、6月13日が7羽、7月16日になると0羽、翌年7月23日も0羽であった。ヒガラは、6羽、2羽、1羽であった。B区間では、オオルリは2015年6月13日が12羽であったのが、翌年7月23日には1羽しか記録されなかった。キビタキは、2015年は6羽であったのが、翌年は1羽であった。センダイムシクイとミソサザイは、2015年にはそれぞれ8羽、3羽だったのが、翌年は0羽であった。

このように一部の鳥種については、調査時期が異なると記録される個体数も大きく異なっていた。このことは、調査対象地の鳥類群集を把握するには、調査時期を変えて、繰り返し調査をおこなうことが望ましいことを示唆している。

種名\標高 (m)	500-	600-	700-	800-	900-	1000-	1100-	1200-	1300-
ヤマドリ									
キジバト									
アオバト									
ジュウイチ									
ホトトギス									
ツツドリ									
カッコウ									
クマタカ									
コゲラ									
オオアカゲラ									
アカゲラ									
アオゲラ									
モズ									
カケス									
ホシガラス									
ハシブトガラス									
コガラ									
ヤマガラ									
ヒガラ									
シジュウカラ									
イワツバメ									
ヒヨドリ									
ウグイス									
ヤブサメ									
エナガ									
エゾムシクイ									
センダイムシクイ									
メジロ									
ゴジュウカラ									
ミソサザイ									
カワガラス									
マミジロ									
トラツグミ									
クロツグミ									
コルリ									
キビタキ									
オオルリ									
キセキレイ									
ビンズイ									
ウソ									
ホオジロ									
ノジコ									
クロジ									

図5. 出現鳥類の標高分布

(5) 越冬期の鳥類群集

2015年12月2日に鉢森沢からウシロ沢までの間を調査した。A区間とB区間である。それぞれ往復しているのので、繁殖期と同様、個体数の多いほうを代表値とした。アトリが最も多く、全体の28.9%を占めていた。次がマヒワで23.6%であった。これらは、いずれも冬鳥として大きな群れで出現したものである。アトリはブナの種子を、マヒワはヤマハンノキの種子を採食していた。繁殖期には、上位に来ていなかったエナガが3位と、多く記録された。シジュウカラ、ツグミ、ゴジュウカラ、ヤマガラがこれに続いた(表4、図6)。

新潟県が多雪環境下にある低山帯で越冬鳥類群集を調べた金子(2012)は、冬季に見られる鳥類で個体数の多い優占種はシジュウカラやエナガなどの混群形成種であり、アトリやマヒワなどアトリ科の鳥が多数飛来する場合はこれらが優占種となると結論づけた。今回もアトリとマヒワの大きな群れが出現しており、これら2種が優占種となったものである。

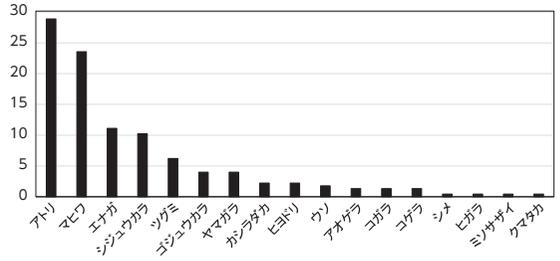


図6. 越冬期の鳥類の優占度(鉢森沢～ウシロ沢)

【文献】

金子与止男(2012)多雪地域低山帯の越冬鳥類群集. 森林野生動物研究会誌37: 7-15.
 鈴木祥悟(1999)津軽半島袴腰岳ブナ林の繁殖鳥類群集. 東北森林科学会誌4(2): 13-16.
 鈴木祥悟(2000)森吉山ブナ林の繁殖鳥類群集. 東北森林科学会誌5(1): 27-30.
 鈴木祥悟・由井正敏・中村充博(2005)白神山地暗門野生動物モニタリング調査地の繁殖鳥類群集. 東北森林科学会誌10(1): 49-52.
 由井正敏(1974)繁殖期における小鳥類の生息数調査法に関する研究. 林業試験場研究報告264: 13-84.
 由井正敏(1976)森林性鳥類の群集構造解析Ⅰ. 林相間類似性と類型化および種構成(繁殖期). 山階鳥類研究所報告. 8(3): 223-248.

表4. 越冬期の鳥類センサス結果

種名\調査区間	年 2015 2015	
	月日 12/2	12/2
クマタカ	・	1
コゲラ	2	1
アオゲラ	2	1
コガラ	3	・
ヤマガラ	4	5
ヒガラ	1	・
シジュウカラ	8	15
ヒヨドリ	3	2
エナガ	13	12
ゴジュウカラ	5	4
ミソサザイ	1	・
ツグミ	14	・
アトリ	59	6
マヒワ	53	・
ウソ	4	・
シメ	1	・
カシラダカ	5	・
種数	16	9
個体数合計	178	47
多様度指数(H')	2.82	2.6

表2. 出現鳥類一覧。季節型はRが留鳥、Sが夏鳥、Wが冬鳥。
日本鳥学会(注)と著者の観察結果をもとに判断した。

科名	種名	学名	季節型
キジ科	ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmeringii</i>	R
ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	R
	アオバト	<i>Treron sieboldii</i>	R
カッコウ科	ジュウイチ	<i>Hierococcyx hyperythrus</i>	S
	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	S
	ツツドリ	<i>Cuculus optatus</i>	S
	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	S
ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	S
タカ科	ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	R
	クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>	R
カワセミ科	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	S
キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	R
	オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>	R
	アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	R
	アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	R
モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	R
カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	R
	ホシガラス	<i>Nucifraga caryocatactes</i>	R
	ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	R
シジュウカラ科	コガラ	<i>Poecile montanus</i>	R
	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>	R
	ヒガラ	<i>Periparus ater</i>	R
	シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	R
ツバメ科	イワツバメ	<i>Delichon dasypus</i>	S
ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	R
ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	S
	ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>	S
エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	R
ムシクイ科	エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	S
	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	S
メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	R
ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	R
ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	R
カワガラス科	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	R

科名	種名	学名	季節型
ヒタキ科	マミジロ	<i>Zoothera sibirica</i>	S
	トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	R
	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	R
	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	R
	ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	W
	コルリ	<i>Luscinia cyane</i>	S
	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	S
	オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	S
セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	R
	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	R
	ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	S
アトリ科	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	W
	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	W
	ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	R
	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	R
ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	R
	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	W
	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	S
	クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	S

注) 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会. 三田.

Bird Communities of Geto, Iwate Prefecture

Yoshio KANEKO

Abstract

Geto, located in Iwate Prefecture, is famous for its vast beech forest, where bird communities were investigated in 2015 and 2016. Fifty three species belonging to 23 families were observed. The most dominant species was *Ficedula narcissina*, followed by *Cettia diphone*, *Parus minor*, *Periparus ater*, *Cyanoptila cyanomelana*, *Luscinia cyane* and *Phylloscopus coronatus*. The area was divided into two parts, above and under 1,000 meters altitude. The lower altitudinal area was dominated by *Ficedula narcissina*, *Parus minor*, *Cyanoptila cyanomelana* and *Periparus ater*. On the other hand, the higher altitudinal area was dominated by *Cettia diphone*, *Luscinia cyane*, *Parus minor* and *Emberiza variabilis*. I concluded that Geto area as a whole maintains bird communities typical to beech forests with dense understory.

Key words

Geto, beech forest, bird communities, dominant species